

## 汎用的解釈と慣用的解釈

—接辞「御」の用例分析—

言語学・応用言語学

ILT11126G

2011（平成 23）年度入学

廣瀬郁子

2015（平成 27）年 1 月提出

## 要旨

接辞「御」の用法で最もよく見られる用法は、丁寧な日本語表現を形成することである。しかし、接辞「御」が含まれていることが観察できるにも関わらず、特段丁寧であるとはみなし難い日本語表現も広く浸透している。そこで、本論文ではまずどのような日本語表現から接辞「御」が観察されるかを把握したうえで、接辞「御」が接続していることが日本語話者にどのような認識をもたらすかを考察することとする。本論文は、接辞「御」をもたらす解釈は画一的でないことを主張する。言語理解という観点から見れば、接辞「御」を含む日本語表現を読み取った場合の言語処理では、丁寧語としての理解をしないことが一部慣用化しているという現象が示唆される。言語使用という観点から見れば、丁寧語を形成するという意図があるかないかに関わらず、接辞「御」を接続させることが慣用化しているという現象も起こることが窺える。

## 目次

1. はじめに	1
2. 従来の研究のまとめ	2
2.1. 文処理についての言及	2
2.2. 村田(2009)による分類	2
2.3. 本論文で取り扱う現象	2
3. 類例の多い用例	4
3.1. [御+名詞 N1] / 名詞 N1	4
3.1.1. 動詞を含まない N1	4
3.1.2. 動詞を含む N1	7
3.2. [御+疑問詞 WH1] / 疑問詞 WH1	8
3.3. [御+形容詞 A1] / 形容詞 A1	8
3.4. [御+副詞 Adv1] / 副詞 Adv1	10
3.5. [御+文 S1] / 文 S1	10
3.6. [御+動詞句 VP1] / 動詞句 VP1	10
3.6.1. NP [御+N (VP1)] ・ NP [御+VP1+「の」+N]	11
3.6.1.1. N [御+VP1] / VP1 の連用形	13
3.6.1.2. NP [御+VP1+「の」+N]	14
3.6.2. AdvP [御+VP1+「の」+N]	14
3.6.3. VP [御+VP1+「に」+動詞「なる」] / VP1	15
3.6.4. VP [御+VP1+動詞 V] / VP1	15
3.6.4.1. 自分の動作を指す VP1	15
3.6.4.2. 他者の動作を指す VP1	16
3.6.5. VP [御+VP1] / VP1 の命令形	17
4. 例外的な用例	19
4.1. 「御」を含む名詞	19
4.1.1. N [御+語 W]	19
4.1.1.1. W=名詞	19
4.1.1.2. W=造語成分	21
4.1.1.3. W がなまる名詞	22
4.1.1.3.1. W の音が脱落する場合	22
4.1.1.3.2. W の音が異なる場合	22
4.1.2. N [御+語 W1+語 W2]	23

4.1.3. N [御+語 W1+語 W2+語 W3]	25
4.1.4. N 「御+動詞句」	25
4.1.5. N [御+文]	26
4.1.6. 「御」を含む固有名詞	26
4.2. [御+VP] を含む動詞句	27
4.2.1. 使用が限定的な VP1	27
4.2.2. 挨拶文の一部を成す VP1	27
5. 「御」を含む句・節	28
5.1. 「御」を含む NP	28
5.1.1. NP [ [御+語 W1] +語 W2]	28
5.1.2. NP [接辞+ [御+語 W] ]	29
5.2. 「御」を含む VP	29
5.2.1. VP [御+語 W+VP]	29
5.2.2. VP [御+語 W+P+VP]	30
5.3. 「御」を含む AP	30
5.4. 「御」を含む副詞節	31
6. 現象の分析	32
6.1. 敬語の一部としての「御」の特徴	32
6.2. 敬語の一部といえない「御」の特徴	32
6.3. 品詞の変化	33
6.4. 敬称と「御」の組み合わせ	33
7. 結論	34

## 1. はじめに

日本語の形態素の一つに、「御」という接辞がある。読みは/o/であることが多く、/go/や/oN/、/gyo/、/mi/とも発音されることがある。この接辞は、敬語を形成する接辞として広く語中や文中に見られる。ここで、「敬語を形成する」というのは、言語を通じたコミュニケーションにおいて、慇懃さを表出したり、へりくだるか相手を敬うかによって敬意を表したりする言葉を作ることを指す。例えば社会的身分が自分より高い者に対する言葉遣いや、幼い子供への語りかけ、信仰や冠婚葬祭に関わる改まった場での対話の中にその現象を観察することができる。このような場合には恭しい言語使用が求められるために、大抵の日常会話では接辞「御」を付けずに使用している語・句・文にも接辞「御」を接続させることがある。おおよそこの場合には、以下の3つの条件を満たしている。

1. 接辞「御」とその前後の形態素や語句とを別個に意味処理する。
2. 接辞「御」の有無によって、その日本語表現が指し示す内容に相違はない。
3. 接辞「御」の有無によって、接辞「御」に後続する品詞に相違はない。

つまり、接辞「御」に接続する形態素や語句との膠着は、その分解が意味処理に影響するほど強くはなく、品詞の変化にも関与しない。その上で、接辞「御」には敬語を形成するという役割のみが与えられるのが一般的である。しかし、接辞「御」が含まれている日本語表現が必ずしも敬語として認識されるわけではない。接辞「御」が含まれているということが事実として容認できるとしても、接辞「御」によって敬語が形成されているということ容認しがたい場合も存在する。そこで、本論文ではまず接辞「御」が観察される語・句・節・文はどのようなものがあるかを多数挙げる。それを踏まえ、接辞「御」の接続がどのような認識をもたらすかを分析することとする。

## 2. 従来の研究のまとめ

### 2.1. 文処理についての言及

まず、文字や音声を認識してからそれらに対して意味解釈をするまでの言語処理について、大津 他(2005: 7-8)の見解は次のようなものである。

- (1) 文を処理し理解するためには、(中略)入力された文を、構成素と呼ばれる言語的単位(語・句・節など)に分解して認識する必要がある。さらに、これとは逆に、個々の言語的単位をまとめて最終的な文に統合することが要求される。

「御」という形態素が「構成素」に含まれるかどうかについて明確な記述は確認できていないが、語中や文中の形態素も、分解によって個々の形態素に区切られたうえで統合処理を行っていると考えられる。接辞「御」とその前後の構成素・形態素を切り離して解釈することができないのであれば、その接辞「御」を含む構成素においては、先述の「分解」と「統合」が起こっているとは言い難い。

### 2.2. 村田(2009)による分類

村田(2009)は、接頭辞「お」の用法を3つに分類している。そのうちの[名詞化した「お」]に分類されているものは、接辞「御」とその後続の語との分解と統合は起こらないものとみられる。しかし、村田(2009)では、「お」を付ける頻度が比較的高ければ[名詞化した「お」]に分類しているために、「お」を除いた語が他の文脈中や構文中では十分名詞として機能するにも関わらず、その語に「お」が接続した語が[名詞化した「お」]に分類されている。また、形容詞、副詞および文などは分類の対象とされていない。けれども、[名詞化した「お」]というカテゴリを作ることによって、接頭辞「お」を、状況に応じて語に付けるものと、語から取り除いた形ではほぼ日本語として成り立たないものに区別しようとしたことが分かる。

### 2.3. 本論文で取り扱う現象

接辞「御」は接頭辞として使用されることが多いが、「姉御」という語では接尾辞として接続している他、「親御さん」「姉御肌」では接尾辞「御」の後ろにさらに形態素を後続させている。こうした例は希少だが、接辞「御」の使われ方が接頭辞に限らないことを示すものである。接辞「御」は接頭辞としても接尾辞としても使われ、またそれが接続して構成される語の品詞は名詞のみに留まらない。本論文では、接辞「御」が含まれている表現を、品詞を限定せずに観察することを試みたい。また、接頭辞として使われているものと接尾辞として使われているものを区別しない。本論文で接辞「御」だと判断したもの

は、「御」という文字を当てるのが容認できる接辞とする。読みは/o/, /oN/, /go/, /gyo/, /mi/であるものを扱う。「御」という字を当てると判断した接辞の中には、/o/と発音し「阿」という字を当てることもあるものと、/mi/と発音し「神」という字を当てることもあるものも含む。

### 3. 類例の多い用例

(2a)に含まれる3つの接辞「御」を除くと、恭しさの程度は低くなる。しかし、指し示す内容には変化がない。このように、接辞「御」が敬語を形成していると認識でき、接辞「御」の有無が後続の構成素の意味を把握するのに影響しないという用例が多い。

- (2) a. お偉いお方の言うことをお聞きなさい。
- b. 偉い方の言うことを聞きなさい。

#### 3.1. [御+名詞 N1] /名詞 N1

次の表の[御+N1]とN1は、いずれも容認度の低くない名詞であり、指し示す内容が同一である。<sup>1</sup>

##### 3.1.1. 動詞を含まない N1

ご愛嬌／愛嬌	お会計／会計	お国柄／国柄	お皿／皿
お相子／相子	お顔／顔	お首／首	お猿／猿
ご挨拶／挨拶	お鏡／鏡	お車／車	ご参拝／参拝
お相手／相手	ご家族／家族	ご苦勞／苦勞	お散歩／散歩
お生憎／生憎	お風邪／風邪	お稽古／稽古	お塩／塩
お味／味	お方／方	ご契約／契約	ご支援／支援
お足元／足元	ご活躍／活躍	お怪我／怪我	お時間／時間
ご安心／安心	ご家庭／家庭	お化粧／化粧	お仕事／仕事
ご案内／案内	ご加入／加入	ご結婚／結婚	ご自身／自身
お池／池	お金／金	ご決断／決断	ご支度／支度
ご意見／意見	お釜／釜	ご研究／研究	ご自宅／自宅
ご意思／意思	お身体／身体	ご謙遜／謙遜	ご質問／質問
ご遺志／遺志	ご開心／開心	ご検討／検討	お芝居／芝居
ご一読／一読	ご感想／感想	お紅茶／紅茶	お品／品
ご一行／一行	ご鑑賞／鑑賞	お声／声	ご自分／自分
ご一緒／一緒	ご歓談／歓談	お志／志	ご自慢／自慢
ご一服／一服	ご勘弁／勘弁	お言葉／言葉	ご氏名／氏名
おいとま／いとま	お気／気	お米／米	お酌／酌
お芋／芋	ご機嫌／機嫌	ご在宅／在宅	お写真／写真
ご引退／引退	ご記入／記入	ご才能／才能	お受験／受験
ご案内／案内	お着物／着物	お財布／財布	ご主人／主人
お歌／歌	お義理／義理	お裁縫／裁縫	お習字／習字
お家／家	お客／客	お魚／魚	ご宿泊／宿泊
お家柄／家柄	お灸／灸	お先／先	ご趣味／趣味
おうどん／うどん	お給料／給料	お酒／酒	ご出席／出席
お馬／馬	お行儀／行儀	お匙／匙	ご住所／住所
お噂／噂	ご兄弟／兄弟	お座敷／座敷	ご使用／使用
ご縁／縁	ご協力／協力	お刺身／刺身	お正月／正月
ご遠慮／遠慮	お口／口	お砂糖／砂糖	ご紹介／紹介
ご恩／恩	お国／国	お作法／作法	ご招待／招待

ご冗談／冗談	お近く／近く	お墓／墓	お饅頭／饅頭
お醤油／醤油	お力／力	お馬鹿／馬鹿	おまんま／まんま
お食事／食事	お茶碗／茶碗	お馬鹿者／馬鹿者	おみ足／足
ご職業／職業	ご注意／注意	お肌／肌	お蜜柑／蜜柑
ご所望／所望	ご注目／注目	お初／初	おみくじ／くじ
お尻／尻	ご注文／注文	お花／花	お水／水
お汁／汁	お調子／調子	お鼻／鼻	お店／店
お汁粉／汁粉	お猪口／猪口	お話／話	お味噌／味噌
ご心配／心配	お次／次	お花見／花見	お味噌汁／味噌汁
ご辛抱／辛抱	お月見／月見	お早め／早め	お耳／耳
ご親睦／親睦	おつもり／つもり	お彼岸／彼岸	お土産／土産
お酢／酢	お通夜／通夜	お髭／髭	お婿／婿
お姿／姿	おつゆ／つゆ	お久しぶり／久しぶり	ご無用／無用
お少し／少し	お釣り／釣り	お膝／膝	ご迷惑／迷惑
お寿司／寿司	お手紙／手紙	お膝元／膝元	お眼鏡／眼鏡
お相撲／相撲	お手柄／手柄	お人／人	お面／面
ご成功／成功	お手数／手数	お人柄／人柄	お餅／餅
ご性別／性別	お手製／手製	お一口／一口	お役／役
お席／席	お手荷物／手荷物	お一皿／一皿	お役所／役所
お赤飯／赤飯	おデブ／デブ	おひとつ／ひとつ	お役人／役人
お説教／説教	お手間／手間	お一人／一人	お役目／役目
お背中／背中	お手前／手前	おひにち／ひにち	お野菜／野菜
お世話／世話	お寺／寺	おひま／ひま	ご厄介／厄介
お線香／線香	お天気／天気	ご病気／病気	お山／山
おぜんざい／ぜんざい	お電話／電話	お昼／昼	お湯／湯
おせんべい／せんべい	おトイレ／トイレ	お昼寝／昼寝	ご用／用
お洗濯／洗濯	ご到着／到着	お魅／魅	ご用意／用意
お蕎麦／蕎麦	お豆腐／豆腐	ご夫婦／夫婦	ご用件／用件
お傍／傍	おところ／ところ	ご不幸／不幸	ご用事／用事
お空／空	お年／年	ご夫妻／夫妻	ご容赦／容赦
お掃除／掃除	おん年／年	ご無事／無事	ご様子／様子
お惣菜／惣菜	お年頃／年頃	お蓋／蓋	ご容態／容態
お葬式／葬式	お隣／隣	おふたつ／ふたつ	ご要望／要望
ご相談／相談	お友達／友達	お二人／二人	お洋服／洋服
ご卒業／卒業	お仲間／仲間	お仏壇／仏壇	ご予定／予定
お題／題	お情け／情け	お筆／筆	お嫁／嫁
ご退室／退室	ご納得／納得	お布団／布団	ご予約／予約
お台所／台所	お鍋／鍋	お船／船	ご理解／理解
ご対面／対面	お名前／名前	おフランス／フランス	ご利用／利用
ご対応／対応	お二階／二階	お風呂／風呂	ご両親／両親
お互い／互い	お肉／肉	おへそ／へそ	お料理／料理
お宝／宝	おニュー／ニュー	お弁当／弁当	ご旅行／旅行
お出汁／出汁	ご入学／入学	お部屋／部屋	ご臨終／臨終
お煙草／煙草	お庭／庭	お勉強／勉強	お留守／留守
お便り／便り	お人形／人形	お返事／返事	お留守番／留守番
お誕生／誕生	お値段／値段	ご報告／報告	お礼／礼
お誕生日／誕生日	お熱／熱	お帽子／帽子	おん礼／礼
お団子／団子	おねんね／ねんね	ご褒美／褒美	ご連絡／連絡
ご堪能／堪能	ご年配／年配	お盆／盆	ご老人／老人
ご知恵／知恵	ご配慮／配慮	ご本／本	

表 1 [御+N1] / N1 の比較

接辞「御」は女性の名の前に付く場合もある。日本では女性の名に/o/を付けて呼ぶ習慣があったためである。ときに敬称が合わせて付けられる。名, [御+名], [[御+名]+敬称] はいずれも同じ女性を指す呼び名という点で変わりがない。<sup>2</sup>敬称は人名のみならず一般名詞にも後続することがある。次の表の N1 と [御+N1] と [[御+N1]+敬称] はいずれも容認度の低くない名詞であり、指し示す内容が同一である。

客／お客／お客様・お客さん	嫁／お嫁／お嫁さん
一人／お一人／お一人様・お一人さん	馬鹿／お馬鹿／お馬鹿さん
二人／お二人／お二人様・お二人さん	猿／お猿／お猿さん
姑／お姑／お姑様・お姑さん	馬／お馬／お馬さん
主人／ご主人／ご主人様	魚／お魚／お魚さん
世話／お世話／お世話様	花／お花／お花さん
生憎／お生憎／お生憎様	芋／お芋／お芋さん
婿／お婿／お婿さん	

表 2 N1 / [御+N1] / [[御+N1]+敬称] の比較

N1 と [御+N1] の指し示すものが同一で、それらと [[御+N1]+敬称] の指し示す内容が異なる場合もある。

- (3) a. お隣の子に話しかける  
b. お隣さんの子に話しかける
- (4) a. お相撲を見に行く  
b. お相撲さんを見に行く
- (5) a. 嘘つきなのはお互いだ。  
b. 嘘つきなのはお互い様だ。
- (6) a. 部長も、急な問題解決に大変ご苦労でした。  
b. 部長も、急な問題解決に大変ご苦労様でした。

[御+N1] という名詞は容認しづらいが、N1 および [御+N1+敬称] で構成された語は容認しやすく指し示すものが同一である場合もある。

子／お子様・お子さん	殿／お殿様
孫／お孫様・お孫さん	姫／お姫様
親／親御様・親御さん	肉屋／お肉屋さん
地藏／お地藏様・お地藏さん	花屋／お花屋さん
医者／お医者様・お医者さん	寿司屋／お寿司屋さん
釈迦／お釈迦様・お釈迦さん	そば屋／おそば屋さん
稲荷／お稲荷様・お稲荷さん	葬式屋／お葬式屋さん
日／お日様	弟子／お弟子さん
月／お月様	時計／お時計さん
星／お星様	寝坊／お寝坊さん
妃／お妃様	榊田 <sup>3</sup> ／お榊田さん

表3 N1／【御+N1+敬称】の比較

### 3.1.2. 動詞を含むN1

名詞の中には、動詞の連用形と他の形態素を接続させて構成されたものもある。そうした名詞に接辞「御」が接続している場合、接辞「御」は動詞に接続していると認識するよりその名詞に接続していると認識するのが自然である。

お漬け物／漬け物	お飲み物／飲み物
お買い物／買い物	お履き物／履き物
お届け物／届け物	お忘れ物／忘れ物
お預かり物／預かり物	お持ち物／持ち物

表4 N【御+N1【V+N2】】／N1【V+N2】の比較

お金持ち／金持ち	お休み／休み
お金儲け／金儲け	お間抜け／間抜け
お気兼ね／気兼ね	お目当て／目当て
お気持ち／気持ち	お手入れ／手入れ
お口直し／口直し	お手続き／手続き
お心当たり／心当たり	お手拭き／手拭き
お心遣い／心遣い	お湯飲み／湯飲み
お年寄り／年寄り	

表5 N【御+N1【N2+V】】／N1【N2+V】の比較

お小遣い／小遣い

表6 【御+N1【接辞+V】】／N1【接辞+V】の比較

### 3.2. 【御+疑問詞WH1】／疑問詞WH1

(7a)と(7b), また(8a)と(8b)は、いずれも容認度の低くない疑問詞であり、指し示す内容が同一である。

- (7) a. おいくら  
b. いくら

- (8) a. おいくつ  
b. いくつ

### 3.3. 【御+形容詞A1】／形容詞A1

次の表の【御+形容詞A1】とA1は、いずれも容認度の低くない形容詞句であり、指し示す内容が同一である。

お安い／安い	お詳しい／詳しい
お高い／高い	お優しい／優しい
お偉い／偉い	お懐かしい／懐かしい
おいたわしい／いたわしい	お羨ましい／羨ましい
おめでたい／めでたい	お悪い／悪い
お早い／早い	お熱い／熱い
お若い／若い	お近い／近い
お恥ずかしい／恥ずかしい	お眠い／眠い
お美しい／美しい	お古い／古い
お忙しい／忙しい	おかわいらしい／かわいらしい
お珍しい／珍しい	お見苦しい／見苦しい
お堅い／堅い	お待ち遠しい／待ち遠しい
お強い／強い	お名残り惜しい／名残り惜しい
お辛い／辛い	お聞き苦しい／聞き苦しい
お騒がしい／騒がしい	お求めやすい／求めやすい

〈ナ形容詞〉

ご賢明な／賢明な	お下劣な／下劣な
おきれいな／きれいな	ご有名な／有名な
おかわいそうな／かわいそうな	お得意な／得意な
お淑やかな／淑やかな	お利口な／利口な
お上手な／上手な	お好きな／好きな
お丈夫な／丈夫な	お嫌いな／嫌いな
お手軽な／手軽な	ご不満な／不満な
お盛んな／盛んな	ご無礼な／無礼な
ご立派な／立派な	お見事な／見事な
お粗末な／粗末な	お元気な／元気な
ご熱心な／熱心な	ごもつともな／もつともな
お下品な／下品な	お気の毒な／気の毒な

表7 【御+A1】／A1の比較

特に連用形に活用した形でよく見られる AP 【御+A】もある。

〈イ形容詞〉

おめでとう（形容詞「おめでたい」のウ音便化の連用形）／めでたい  
お早う（形容詞「お早い」のウ音便化の連用形）／早い

〈ナ形容詞〉

お幸せに／幸せな	お気楽に／気楽な
お大事に／大事な	ご勝手に／勝手な
お静かに／静かな	お速やかに／速やかな
ご丁寧に／丁寧な	お楽しみに／楽しみな
ご親切に／親切な	お元気で／元気な
ご自由に／自由な	お達者で／達者な

表8 【御+A1の連用形】／A1の比較

【御+形容詞】に敬称がついて出来る語もある。A1と【御+A1】は形容詞句であるが、【御+A1】+敬称は名詞句であったり挨拶文であったりする。名詞句の場合、およそ形容詞A1で形容される状態にあるもの・人のことを指す。

偉い／お偉い／お偉い様・お偉いさん  
得意な／お得意な／お得意様・お得意さん

利口な／お利口な／お利口様・お利口さん

粗末な／お粗末な／お粗末様

待ち遠しい／お待ち遠しい／お待ち遠様・お待ち遠さん

早い／お早い・お早う／お早うさん<sup>4</sup>

めでたい／おめでたい・おめでとう／おめでとうさん

表9 A1／【御+A1】／【御+A1】+敬称の比較

### 3.4. 【御+副詞 Adv1】／副詞 Adv1

(9)～(11)の【御+Adv1】と Adv1 は、いずれも容認度の低くない副詞句あるいはナ形容詞の語幹であり、指し示す内容が同一である。

- (9) a. ごゆっくり  
b. ゆっくり

- (10) a. ごゆるりと  
b. ゆるりと

- (11) a. ご大層  
b. 大層

### 3.5. 【御+文 S1】／文 S1

(12a)と(12b), (13a)と(13b)は、いずれも容認度の低くない挨拶文であり、指し示す内容が同一である。

- (12) a. おご馳走様でした  
b. ご馳走様でした

- (13) a. おこんにちは  
b. こんにちは

### 3.6. 【御+動詞句 VP1】／動詞句 VP1

文中で見られる【御+VP】には、主に次の3つの場合がある。

1. 動詞句を形成する。
2. 名詞句を形成する。
3. 副詞句を形成する。

動詞句を形成する場合、さらに次の3つの場合がある。

1. VP [御+VP1の連用形+助詞「に」+動詞「なる」] がVP1と同一の内容を指し示す。
2. VP [御+VP1の連用形+動詞V] がVP1と同一の内容を指し示す。
3. VP [御+VP1の連用形] がVP1の命令形と同一の内容を指し示す。

名詞句を形成する場合、さらに次の2つの場合がある。

1. [御+動詞句] で、名詞となる。
2. [御+動詞句] に助詞「の」と名詞を後続させて、名詞句を形成する。

副詞句を形成する場合、[御+動詞句] に助詞「の」と名詞を後続させて副詞句となる。

例えば、[御+動詞「答える」の連用形]を含む日本語文は以下のようなものがある。

- (14) a. 答えは決まりましたか。  
b. 答えを聞かせてください。  
c. 答えに自信が持てますか。  
d. それがあなたのお答えですか。  
e. あなたのお答え次第です。  
f. 答えの方がいらっしゃる。  
g. あなたがお答えの質問は問6でしたよね。  
h. 答えの際、ボタンをお押しください。  
i. 答えのところ口を挟んで申し訳ない。  
j. 質問にお答えの上、サインをお願いします。  
k. 部長がお答えになる。  
l. 私がお答えします。  
m. 部長がお答えくださる。  
n. その質問には、既に部長がお答えでしたよ。  
o. お答えください。  
p. 早くお答え。

### 3.6.1. NP [御+N (VP1)] ・ NP [御+VP1+「の」+N]

動詞句の連用形が熟語の一部でない名詞となる場合、その名詞に対する接辞「御」の有無は文章の容認度と意味理解に大きく影響しない。

(14a) 答えは決まりましたか。

(15) 答えは決まりましたか。

(14b) 答えを聞かせてください。

(16) 答えを聞かせてください。

(14c) 答えに自信が持てますか。

(17) 答えに自信が持てますか。

(14d) それがあなたのお答えですか。

(18) それがあなたの答えですか。

(14e) あなたのお答え次第です。

(19) あなたの答え次第です。

連用形が名詞となる動詞句VP1でも、[御+VP1]に後続する語によっては、接辞「御」がそのような名詞に接続していると理解しづらい場合もある。(14f), (14g)は、[御+VP1+助詞「の」]を、VP1の連体形あるいは過去形に置き換えると、指し示す内容を同一にしたまま容認度の高い文にすることができる。

(14f) 答えの方がいらっしゃる。

(20) a. \*答えの方がいらっしゃる。

b. 答える(答えた)方がいらっしゃる。

(14g) あなたがお答えの質問は問6でしたよね。

(21) a. \*あなたが答えの質問は問6でしたよね。

b. あなたが答える(答えた)質問は問6でしたよね。

よって、[御+VP1+助詞「の」+N]の形式をとる名詞句は、[御+VP1]が名詞だと認識しやすいものとしづらいものがある。

(22) a. あなたのお住まいの安全のための、お住まいのリフォーム

b. あなたの住まいの安全のための、住まいのリフォーム

c. \*あなたの住む(住んだ)安全のための、住む(住んだ)リフォーム

(23) a. 福岡市にお住まいの方で、自身がお住まいの地域が好きな方

b. \*福岡市に住まいの方で、自身が住まいの地域が好きな方

c. 福岡市に住まわれる方で、自身が住まわれる地域が好きな方

### 3.6.1.1. N [御+VP1] /VP1 の連用形

(14a)~(14e), (22a)のように [御+VP1] と VP1 の連用形がいずれも名詞で、指し示す内容が同一であるものは例えば次のようなものがある。

おまじない／まじない	お向かい／向かい	お取り違え／取り違え
お慰み／慰み	おもてなし／もてなし	お取り換え／取り換え
お取り引き／取り引き	お飾り／飾り	お履き間違い／履き間違い
お考え／考え	お焦げ／焦げ	お知り合い／知り合い
お生まれ／生まれ	お休み／休み	お付き合い／付き合い
おのろけ／のろけ	お帰り／帰り	お引越し／引越し
お遊び／遊び	お祭り／祭り	お申し込み／申し込み
お怒り／怒り	お気遣い／気遣い	お見送り／見送り
お答え／答え	お片付け／片付け	お見積り／見積り
お好み／好み	お手伝い／手伝い	お見通し／見通し
お誘い／誘い	お間違い／間違い	お見舞い／見舞い
お察し／察し	お着替え／着替え	お呼び出し／呼び出し
お支払い／支払い	お受け取り／受け取り	お持ち込み／持ち込み
お別れ／別れ	お出迎え／出迎え	お似合い／似合い
お詫び／詫び	お問い合わせ／問い合わせ	お見合い／見合い
お住まい／住まい	お取り扱い／取り扱い	お知らせ／知らせ

表 10 N [御+VP1] /VP1 の連用形の比較

名詞である VP1 と N1 [御+VP1] の指し示すものが同一で、それらと [N1+敬称] の指し示すものが異なる場合もある。

- (24) a. 手伝い  
b. お手伝い  
c. お手伝いさん

[御+VP1] という名詞は容認しづらいが、VP1 の連用形および [御+VP1+敬称] で構成された名詞は容認しやすい場合がある。

- (25) a. 連れ  
b. お連れ様

- (26) a. 疲れ  
b. お疲れ様  
c. お疲れさん

(25b)は(25a)と同一のものを指すが、(26b), (26c)は(26a)と同一のものを指すのではなく、ねぎらいの挨拶と認識するのが一般的である。

### 3.6.1.2. NP [御+VP1+「の」+N]

(14f), (23a)のように、名詞 N が「方」である場合、多くの動詞で容認しやすい。また、N が「物」である場合、目的格をとる多くの動詞で容認しやすい。

お見えの方／見える方	お休みの方／休む方
お会いの方／会う方	お帰りの方／帰る方
お越しの方／越す方	お飲みの方／飲む方
お通りの方／通る方	お集まりの方／集まる方
お困りの方／困る方	お済みの方／済む方
お読みの方／読む方	お待ちの方／待つ方
お呼びの方／呼ぶ方	お連れの方／連れる方

お読みの物／読む物	お望みの物／望む物
お飲みの物／飲む物	お運びの物／運ぶ物

表 11 NP [御+VP1+助詞「の」+N1] /NP [VP1+N1] の比較<sup>5</sup>

その他、(14g)や(23a)のように、動詞により N には様々な名詞をとる。

お付きの者／付く者	お疲れの様子／疲れた様子
お抱えの運転手／抱える運転手	お叱りの電話／叱る電話
お近づきのしるし／近づいたしるし	ご存じの事／存じている事

表 12 NP [御+VP1+助詞「の」+N1] /NP [VP1+N1] の比較 2

### 3.6.2. AdvP [御+VP1+「の」+N]

N が「際」や「ところ」, 「上」の場合、[御+VP1+助詞「の」+N] は [VP1 の連体形などの活用形+N] と同じ内容を指す副詞句となる。

お呼びの際／呼ぶ際	お帰りの際／帰る際
お読みの際／読む際	お降りの際／降りる際
お上がりの際／上がる際	お立ち寄りの際／立ち寄る際
お飲みの際／飲む際	お休みのところ／休んでいるところ
お召し上がりの際／召しあがる際	お読みの上／読んだ上
お休みの際／休む際	お飲みの上／飲んだ上

表 13 AdvP [御+VP1+助詞「の」+N1] /AdvP [VP1+N1] の比較

### 3.6.3. VP [御+VP1+「に」+動詞「なる」] /VP1

次の表の VP [御+VP1+助詞「に」+動詞「なる」] と VP1 はいずれも容認度の低い動詞句であり、指し示す内容が同一である。VP1 は他者の行動を指す。

お呼びになる／呼ぶ	お亡くなりになる／亡くなる
お読みになる／読む	お越しになる／越す
お上がりになる／上がる	お聞きになる／聞く
お飲みになる／飲む	お待ちになる／待つ

表 14 VP [御+VP1+助詞「に」+動詞「なる」] /VP1 の比較

### 3.6.4. VP [御+VP1+動詞 V] /VP1

以下に挙げる [御+VP1 の連用形+V] と VP1 はいずれも容認度の低い動詞句であり、指し示す内容が同一である。

#### 3.6.4.1. 自分の動作を指す VP1

次の表の VP1 は自分の動作を指す。

〈V=「する」の場合〉	
お呼びする／呼ぶ	お預かりする／預かる
お読みする／読む	お送りする／送る
お飲みする／飲む	お受けする／受ける
お会いする／会う	お配りする／配る

〈V=「いたす」の場合〉	
お呼びいたす／呼ぶ	お取り次ぎいたす／取り次ぐ

〈V=「申し上げる」の場合〉

お呼び申し上げる／呼ぶ	お喜び申し上げる／喜ぶ
お読み申し上げる／読む	お祈り申し上げる／祈る
お悔やみ申し上げる／悔やむ	お呼び出し申し上げる／呼び出す
お詫び申し上げる／詫びる	

表 15 VP [御+VP1+動詞 V] /VP1 の比較

### 3.6.4.2. 他者の動作を指す VP1

次の表の VP1 は他者の動作を指す。

〈V=「頂く」の場合〉<sup>6</sup>

お呼び頂く／呼ぶ	お帰り頂く／帰る
お読み頂く／読む	お飲み頂く／飲む
お上がり頂く／上がる	お待ち頂く／待つ
お休み頂く／休む	お召し上がり頂く／召し上がる

〈V=「くださる」の場合〉

お呼びくださる／呼ぶ	お分かりくださる／分かる
お読みくださる／読む	お飲みくださる／飲む

〈V=「なさる」の場合〉

お呼びなさる／呼ぶ	お帰りになさる／帰る
お読みなさる／読む	お飲みなさる／飲む
お休みなさる／休む	お通りになさる／通る

〈V=助動詞「です」（「です」+疑問小辞「か」）、助動詞「だ」（「だ」+助動詞「ない」）のいずれかの場合〉

お呼びです／呼ぶ	お困りですか／困っているか
お待ちです／待つ	お過ごしですか／過ごしているか
お呼びですか／呼んだか	お通りだ／通る
お急ぎですか／急いでいるか	お呼びでない／呼んでない

表 16 VP [御+VP1+動詞 V] /VP1 の比較 2

特に、動詞「くださる」、「なさる」の活用形「ください」、「なさい」がしばしば日本語文の中に見られる。次の表の〔御+VP1+V「ください」／「なさい」〕とVP1の命令形はいずれも容認度の低くない動詞句であり、指し示す内容が同一である。

〈V=「ください」の場合〉

お呼びください／呼べ	お待ちください／待て
お読みください／読め	お確かめください／確かめろ
お上がりください／上がれ	お納めください／納めろ
お休みください／休め	お尋ねください／尋ねろ
お飲みください／飲め	お乗りください／乗れ
お集まりください／集まれ	お避けください／避けろ
お許してください／許せ	お譲りください／譲れ
お押しください／押せ	お気を付けください／気を付けろ
お降りください／降りろ	お引き取りください／引き取れ

〈V=「なさい」の場合〉

お呼びなさい／呼べ	おやりなさい／やれ
お読みなさい／読め	おゆきなさい／ゆけ
お上がりなさい／上がれ	お聞きなさい／聞け
お飲みなさい／飲め	おあげなさい／あげろ

表 17 VP〔御+VP1+V〕／VP1の命令形の比較

### 3.6.5. VP〔御+VP1〕／VP1の命令形

次の表の〔御+VP1の連用形〕とVP1の命令形はいずれも容認度の低くない動詞句であり、指し示す内容が同一である。

お呼び／呼べ	おやめ／やめろ	おゆき／ゆけ
お読み／読め	お泣き／泣け	お聞き／聞け
お上がり／上がれ	お黙り／黙れ	お食べ／食べろ
お飲み／飲め	およこし／よこせ	お待ち／待て
およし／よせ	お入り／入れ	お出で／出でよ

表 18 VP〔御+VP1の連用形〕／VP1の命令形の比較

「お出で」は補助動詞になることもある。

- (27) a. 出直しておいで  
b. 手を洗っておいで

一部の補助動詞にも、接辞「御」が付くことがある。

- (28) a. 運んでおくれ  
b. 運んでくれ

- (29) a. 運んでおやり  
b. 運んでやれ

- (30) a. 運んでおあげ  
b. 運んであげろ

- (31) a. 笑っておしまい  
b. 笑ってしまえ

#### 4. 例外的な用例

##### 4.1. 「御」を含む名詞

###### 4.1.1. N [御+語 W]

###### 4.1.1.1. W=名詞

3.1 では N [御+N1] と N1 で指し示すものが同一だったのに対し、N [御+N1] と N1 とで一般に指し示すものが異なる場合もある。

- (32) a. おふだに書かれた文字  
b. ふだに書かれた文字
- (33) a. 姉御は頼もしい  
b. 姉は頼もしい
- (34) a. お河童の髪型  
b. 河童の髪型
- (35) a. おたまで鍋をかきまぜる  
b. たまで鍋をかきまぜる
- (36) a. おなかがへこんだ  
b. なかがへこんだ
- (37) a. ご当地の観光案内  
b. 当地の観光案内
- (38) a. おかめのお面  
b. かめのお面
- (39) a. おかずが多い  
b. かずが多い
- (40) a. おはぎをつくる  
b. はぎをつくる

- (41) a. おからを食べる  
b. からを食べる
- (42) a. お主に頼みごとをする  
b. 主に頼みごとをする
- (43) a. いつもしているお約束の落ち  
b. いつもしている約束の落ち
- (44) a. 店員さん、お愛想をお願いします。  
b. 店員さん、愛想をお願いします。
- (45) a. 私の十八番を披露する  
b. 私のはこを披露する
- (46) a. お手洗いに行ってくる  
b. 手洗いに行ってくる
- (47) a. お手付きは良くない  
b. 手付きは良くない
- (48) a. 上手なお絵描き  
b. 上手な絵描き

次の表に挙げる [御+N1] と [ [御+N1] +敬称] はいずれも容認度の低くない名詞であり、指し示す内容が同一であるが、N1 と [御+N1] は一般に指し示す内容が同一でない。

---

前／お前／お前さん  
袋／お袋／お袋さん  
陰／お陰／お陰様・お蔭さん  
隠居／ご隠居／ご隠居様・ご隠居さん

---

表 19 N1 / [御+N1] / [ [御+N1] +敬称] の比較 2

#### 4.1.1.2. W=造語成分

接辞「御」を含む名詞を「御」とそれ以外の部分 X に分解した場合、X の中には、他の語に接続して熟語の一部となるか、接辞「御」が接続した形でしかほぼ見られないものもある。

おみ輿	お椀	ご査収	お遊戯
お菓子	御殿	ご自愛	お焼香
お膳	ご飯	ご厚意	お辞儀
お代	ご免	ご足労	ご神木
お香	おかしら	ご高配	お屠蘇
ご託	お転婆	ご高名	お中元
御社	お勘定	ご芳名	お歳暮
御行	ご時世	ご尊顔	お雑煮
御中	お節介	ご名答	お世辞
御意	ご法度	ご加護	お駄賃
お産	おせち	おじゃん	女将
お宅	お伽	ご執心	ご子息
お粥	ご覧	お多福	御曹司
お札 (/o-satu/)	ご愛顧	ご来光	ご令嬢
おでこ	ご健勝	ご祝儀	ご兩人
お供	ご静聴	ごりやく	ご老体

表 20 「御」を含む形で使用される名詞

[御+造語成分<sup>7</sup>] で構成された名詞の一部には敬称を付けることがある。(49b), (49c) は(49a)と指し示すものと同じだが、(50b), (50c)は(50a)と同一のものを指すのではなく、食事後の挨拶と認識するのが一般的である。

- (49) a. お嬢  
b. お嬢様  
c. お嬢さん

- (50) a. ご馳走  
b. ご馳走様  
c. ご馳走さん

造語成分 W1 および [御+W1] が名詞として容認しづらく、[御+W1+敬称] の構成は名詞として容認しやすい場合もある。W1 と [御+W1+敬称] はいずれも指し示す内容は同一である。

母 (/kaR/) /お母様・お母さん	姉 (/neR/) /お姉様・お姉さん
父 (/toR/) /お父様・お父さん	坊/お坊様・お坊さん
爺/お爺様・お爺さん	天道/お天道様
婆/お婆様・お婆さん	愁傷/ご愁傷様
兄 (/niR/) /お兄様・お兄さん	

表 21 造語成分 W1 / [御+造語成分 W1+敬称] の比較

#### 4.1.1.3. W がなまる名詞

##### 4.1.1.3.1. W の音が脱落する場合

次の2つの表の N は、接辞「御」と、音が脱落した W から成る。

N	W	N	W
おこた	こたつ	おもちゃ	もてあそび
おみや	みやげ	おむつ	むつき
おねしょ	ねしょんべん	おやつ	八つ
おしゅうと	しゅうとめ	おこわ	こわめし
お久	お久しぶり	おべっか	弁口
おいた	いたずら	おつむ	つむり
おでん	田楽	おしめ	湿し

表 22 N と、音が脱落していない名詞の W

N	W	N	W
おねむ	眠い	おんぼろ	ぼろい
おふる	古い	お冷や	冷やっこい

表 23 N と、音が脱落していない形容詞の W

##### 4.1.1.3.2. W の音が異なる場合

次の表の N は W が単独で名詞となるとき音とは異なる発音をする。

N [御+W]	N の音素表記	W (名詞)	W の音素表記
お髪	/o-gusi/	髪	/kami/
お骨	/o-kotu/	骨	/hone/
おみ酒	/o-mi-ki/	酒	/sake/

表 24 N [御+W] と名詞 W の比較

#### 4.1.2. N [御+語 W1+語 W2]

[御+W1] や [W1+W2] が語として容認しづらく、[御+W1+W2] の構成では語として容認しやすい場合もある。

接辞	N1	N [御+N1+N1]
御	目	お目目
御	手	お手手
御	か (鯉節)	おかか
御	香	お香香

表 25 N [御+N1+N1] とその各々の形態素

接辞	N1	N2	N [御+N1+N2]
御	手	並み	お手並み
御	手	玉	お手玉
御	徳	用	お徳用
御	まま	こと	おままごと
御	ちよぼ	口	おちよぼ口

表 26 N [御+N1+N2] とその各々の形態素

接辞	接辞	N1	N [御+接辞+N1]
御	無	沙汰	ご無沙汰

表 27 N [御+接辞+N] とその各々の形態素

接辞	数詞	N1	N [御+数詞+N1]
御	一	方	お一方

御	ニ	方	お二方
御	三	方	お三方

表 28 N [御+数詞+N] とその各々の形態素

接辞	A	N1	N [御+A+N1]
御	偉い	方	お偉方

表 29 N [御+A+N] とその各々の形態素

接辞	V	N1	N [御+V+N1]
御	買う	得	お買い得
御	尋ねる	者	お尋ね者
御	吸う	物	お吸い物
御	召す	物	お召し物

表 30 N [御+V+N] とその各々の形態素

接辞	N1	V	N [御+N1+V]
御	目	見える	お目見え
御	目	通る	お目通り
御	百度	参る	お百度参り
御	座	成る	おざなり

〈V が自動詞であり、N1 がその動詞の主語であるもの〉

御	手	すく	お手すき
御	墨	付く	お墨付き
御	門	違う	お門違い

〈V がヲ格をとる動詞であり、N1 がその目的語であるもの〉

御	目	通す	お目通し
御	涙	頂戴する	お涙頂戴
御	世	継ぐ	お世継ぎ
御	色	直す	お色直し
御	裾	分ける	お裾分け
御	手	上げる	お手上げ

〈V がニ格をとる動詞であり、N1 がその目的語であるもの〉

御	宮	参る	お宮参り
---	---	----	------

御 蔵 入る お蔵入り

表 31 N [御+N+V] とその各々の形態素

接辞	V1	V2	N [御+V1+V2]
御	する	置く	おしおき
御	召す	変える	お召し変え
御	あつらえる	向く	おあつらえ向き

表 32 N [御+V1+V2] とその各々の形態素

#### 4.1.3. N [御+語 W1+語 W2+語 W3]

[御+W1] [御+W1+W2] [W1+W2] [W2+W3] [W1+W2+W3] のいずれも容認しづらく、[御+W1+W2+W3] の構成では容認しやすい名詞もある。

(51) お手回り品

#### 4.1.4. N [御+動詞句]

動詞句の連用形が熟語の一部でない名詞となる場合で、[御+VP1] も VP1 の連用形も容認度の低くない名詞だがそれぞれの指し示すものが同一と言い難い場合もある。

- (52) a. スープのお代わりをください。  
b. スープの代わりをください。

また、[御+VP1] が名詞を形成しているが、VP1 の連用形が名詞となると言い難い場合もある。

- (53) a. おしゃぶりを買う。  
b. \*しゃぶりを買う。

このように、VP1 の連用形と N [御+VP1 の連用形] との間で名詞としての容認度や指し示す内容の共通性がみられない場合もある。

お終い／終う	お決まり／決まる	お祈り／祈る
おめかし／めかす	お開き／開く	お返し／返す
お代わり／代わる	お預け／預ける	お清め／清める

お忍び／忍ぶ	お断り／断る	おまけ／まける
お守り／守る	おなり／成る	おつけ／つける
お使い／使う	お揃い／揃う	おみおつけ／つける
お造り／造る	おねだり／ねだる	おしゃれ／しゃれる
おにぎり／にぎる	おひたし／ひたす	おませ／ませる
おむすび／むすぶ	お化け／化ける	おかき／欠く
お喋り／喋る	お祓い／祓う	お役立ち／役立つ
お通じ／通じる	お触れ／触れる	お出掛け／出掛ける
お薦め／薦める	お告げ／告げる	お買い上げ／買い上げる
おはじき／はじく	お笑い／笑う	お買い求め／買い求める
おしぼり／しぼる	お馴染み／馴染む	お見合い／見合う
おしゃぶり／しゃぶる	お供え／供える	お出まし／出ます
おさらい／さらう	おふざけ／ふざける	お任せ／任せる
お祝い／祝う	お勤め／勤める	お呼ばれ／呼ばれる
お願い／願う	お構い／構う	お待たせ／待たせる
お参り／参る	お咎め／咎める	お騒がせ／騒がせる
お試し／試す	おさげ／さげる	お気に入り／気に入る

表 33 N [御+VP1] /VP1 の比較

#### 4.1.5. N [御+文]

「さらば」は別れ際の挨拶文である。これに接辞「御」が接続すると、名詞「おさらば」となる。

- (54) a. 私はここでさらばする。  
b. 私はここでさらばだ。  
c. 彼とはさらばになる。

#### 4.1.6. 「御」を含む固有名詞

地名等の一部には接辞「御」が含まれており、接辞「御」を除いた表現で同じものを指すことはほぼない。この場合の接辞「御」は、敬語を形成する接辞とは認識しにくい。

お茶の水	御笠川	京都御所	お台場
------	-----	------	-----

表 34 「御」を語中に含む固有名詞

## 4.2. 「御+VP」を含む動詞句

### 4.2.1. 使用が限定的な VP1

VP [御+VP1 の連用形+V] の一部では、VP1 が他の構文では使われにくいものである場合もある。

(55) お見逸れいたしました。

(56) お見知りおきください。

(55)に含まれている動詞「見逸れる」、(56)に含まれている動詞「見知りおく」は他の構文ではほぼ見られない。

### 4.2.2. 挨拶文の一部を成す VP1

VP [御+VP1 の連用形+「なさい」] や文末の VP [御+VP1 の連用形] は VP1 の命令形と同じ内容を指すことが多いが、そうでない場合もある。

(57) お休みなさい

(58) お帰りなさい

(59) お休み。

(60) お帰り。

(61) お疲れ。

(57)～(61)は動作を要求するのではなく、挨拶文として認識するのが自然である。

## 5. 「御」を含む句・節

一部の名詞句・動詞句・形容詞句・副詞節においては、文脈に関わらずほぼ常に接辞「御」を含む。

### 5.1. 「御」を含む NP

#### 5.1.1. NP [ [御+語 W1] +語 W2]

次の3つの表の [W1+W2] は名詞句として容認しづらい。

[御+W1]	N1	NP [ [御+W1] +N1]
お湯	殿	お湯殿
お調子	者	お調子者
お年	玉	お年玉
ご意見	番	ご意見番
お庭	番	お庭番
お先	真っ暗	お先真っ暗
お茶	菓子	お茶菓子
	会	お茶会
	葉	お茶っ葉
姉御	肌	姉御肌
ご飯	粒	ご飯粒
お転婆	娘	お転婆娘
おせち	料理	おせち料理
お伽	話	お伽話
お笑い	草	お笑い草
お安い	ご用	お安いご用

表 35 NP [ [御+W] +N] とその各々の構成素

[御+W1]	接辞	NP [ [御+W1] +接辞]
ご用	達	御用達

表 36 NP [ [御+W] +接辞] とその各々の形態素

[御+W1]	V1	NP [ [御+W1] +V1]
お口	汚す	お口汚し
お品	書く	お品書き
お力	添える	お力添え

お茶	漬ける	お茶漬け
お花	摘む	お花摘み
お盆	休む	お盆休み
お湯	張る	お湯張り
お湯	割る	お湯割り
お好み	焼く	お好み焼き
お膳	立てる	お膳立て

表 37 NP [ [御+W] +V ] とその各々の構成素

### 5.1.2. NP [接辞+ [御+語 W] ]

次の表の [接辞+W1] は名詞句として容認しづらい。

接辞	[御+W1]	NP [接辞+ [御+W1] ]
大	御所	大御所

表 38 NP [接辞+ [御+W] ] とその各々の構成素

## 5.2. 「御」を含む VP

### 5.2.1. VP [御+語 W+VP]

次の表の [W1+VP1] は動詞句として容認しづらい。

[御+W1]	VP1	VP [ [御+W1] +VP1 ]
お暇	する	お暇する
ご一緒	する	ご一緒する
お茶	する	お茶する
お試し	ある	お試しあれ
ご賞味	ある	ご賞味あれ
ご覧	ある	ご覧あれ
ご免	なさる	ご免なさい
ご免	くださる	ご免ください
ご座	ある	ござる
	あります	ございます
お高い	留まる	お高く留まる

表 39 VP [ [御+W] +VP ] とその各々の形態素

### 5.2.2. VP [御+語 W+P+VP]

次の動詞句においては、接辞「御」の有無は意味理解に大きく影響しない。

- (62) a. ご精が出る  
b. 精が出る

しかし、一部の動詞句においては、接辞「御」の有無は容認度または意味理解に影響する。

接辞	W1	P1	VP1	VP [御+W1+P1+VP1]
御	目	に	かける	お目にかかる
御	目	に	かかる	お目にかかる
御	株	を	奪う	お株を奪う
御	手	を	拝借する	お手を拝借する
御	茶	を	濁す	お茶を濁す
御	気	に	召す	お気に召す
御	言葉	に	甘える	お言葉に甘える
御	眼鏡	に	かなう	お眼鏡にかなう
御	後	が	よろしいようだ	お後がよろしいようで
御	覧	に	入れる	ご覧に入れる
御	預け	を	食う	お預けを食う
御	褒め	に	与る	お褒めに与る
御	迎え	が	来る	お迎えが来る
御	鉢	が	回る	お鉢が回る
御	里	が	知れる	お里が知れる

表 40 VP [御+W+P+VP] とその各々の形態素

### 5.3. 「御」を含む AP

一部の形容詞句は、接辞「御」の有無が、形容詞句の容認度または意味理解に影響する。

- (63) a. お手柔らかにお願いします。  
b. \*手柔らかにお願いします。

- (64) a. お人好しな子  
b. \*人好しな子

- (65) a. 奥様はお目が高い。  
b. \*奥様は目が高い。

一部の名詞は、接辞「御」と助動詞「だ」の連体形を接続して、ナ形容詞を構成する。

(66) それはまたご苦労なことで。

(67) お茶目な女の子

(68) お得なセール

#### 5.4. 「御」を含む副詞節

一部の副詞節に含まれている接辞「御」の有無は、副詞節の容認度または意味理解に影響する。

- (69) a. お言葉ですが、あなたの提案はありません。  
b. \*言葉ですが、あなたの提案はありません。

## 6. 現象の分析

### 6.1. 敬語の一部としての「御」の特徴

接辞「御」が接続した語が敬語だと認識でき、接辞「御」が接続しない場合よりも恭しいと認識できる場合は大抵、接辞「御」には敬語を形成するという意味があると解釈できている。この意味解釈は、その特性から、汎用的な意味解釈として捉えることができる。なぜなら、第一に、この意味解釈を適用できる「御」の使用例の数は、日常会話の日本語の中で非常に多いからである。第二に、この意味解釈をする「御」が接続する語の品詞は様々だからである。第三に、「御」を付けることが一般的でない語に付いた場合にも、意味解釈としてはさほどの違いがないことが多いからである。自然な日本語としての容認度は高くないが、慇懃さを示す「御」が語に接続していることはおおよそ読みとれる。こうした解釈を適用する「御」の使用例は、もはや数を限ることはできない。接辞「御」の敬語の形成の仕方は、語自体に接続するのみでよい場合が多いが例外もある。例えば、相手の所属する会社を指す語に接辞「御」を付けて表したい場合、「御会社」といわず「御社」という語を使う。同様に、「代金」「紙幣」を敬語化する場合、「お代」「お札」というのが一般的である。

### 6.2. 敬語の一部といえない「御」の特徴

敬語が求められる場かどうかに関わらず「御」が付けられている表現を理解する場合、先述の汎用的解釈の対象になっているとは言い難い。こうした場合の接辞「御」は、接続する語句に制限があり、特定のコロケーションを保ったまま使用されることが慣用的である。文脈・世代・TPOに左右されず、接辞「御」が付けられた状態が維持される。「御」を接続させることが慣用的になる理由として考えられるものはいくつかある。

1. 従来敬語を形成する用法で接辞「御」を接続させていたが、その「御」を含む語句が形式を保ったまま広く使われているため、敬語を必要としない場でも「御」を除いて使うのが難しくなったから。
2. 「御」を接続してできた語句が、次第に従来の意味から遠ざかったから。
3. ある語に「御」を接続して、元の語の意味と異なる新しい語句となっているから。
4. ある複数の語に「御」を接続して、新しい語句が作られているから。

特に、「十八番」「女将」「玩具」など、熟字訓を作る語は、接辞「御」が語に含まれていること自体を認識しづらい。また、「御」に後続している語の音が変化しているものも、本来の後続の語を認識しにくくなる一因となり、そのために語中の接辞「御」を認識するのが難しくなる。すなわち、接辞「御」とその前後の言語的要素とを分解せずに理解する場合もある。

### 6.3. 品詞の変化

慣用的に「御」を接続させる表現の中には、「御」が接続するという点と品詞の変化があるという点の両方が確認できるものもある。今回観察した中では、以下の5パターンを確認することができた。

1. 「御」＋動詞句：名詞
2. 「御」＋文：名詞
3. 「御」＋形容詞（音が脱落したもの）：名詞
4. 「御」＋名詞：ナ形容詞の語幹
5. 「御」＋副詞：ナ形容詞の語幹

挨拶文として、「御」に名詞・形容詞・動詞句のいずれかが接続した語句が使われることもある。

### 6.4. 敬称と「御」の組み合わせ

今回の観察で、語に「御」だけ接続するよりも、接尾辞の「様」「さん」を合わせて接続する方が一般的である例もあることが分かった。例えば、「おまわり」よりも「おまわりさん」の方がよく聞かれる。「客」のように、敬称だけ付けることがなく接辞「御」を合わせて使うことで敬語を形成するものもある。

### 7. 結論

接辞「御」は、品詞も構造も多様な語・句・節・文の中に含まれて使用される。本論文では、その使用例を収集・分類し、ならびにそれをもとに、「御」が敬語を形成する接辞として認識される場合とほぼそうでない場合の両方があることを確かめた。観察によって、接辞「御」は、単に語に接続するだけで敬語を形成する接辞だとは限らないことが明白となった。「御」の接続に伴う別の形態素の接続が、自然な敬語の形成に関わる場合もある。また、前後の自立語や造語成分との間に不可分の関係が生じることも実際に起こっている。このために、接辞「御」に対しての統語処理や意味解釈が省かれる場合もある。今後の言語使用でも、敬語を作る目的で様々な語に接辞「御」の接続を適用することは珍しくないであろう。しかしその反面、「御」を接続させた表現が意味が変化するなどして、敬語ではない表現として使われることも大いにありうる現象である。

---

<sup>1</sup> 本論文で使用しているブラケットは、それで囲まれている複数の言語的要素が接続されていることを指す。ブラケット中の接辞「御」の位置・数は限定しない。本論文で記号として使用している英字 N, A, V, Adv, WH, S, P, NP, AP, VP, AdvP, W はそれぞれ名詞、形容詞、動詞、副詞、疑問詞、文、助詞、名詞句、形容詞句、動詞句、副詞句、語 (N, A, V, 造語成分のいずれかを指す) を表す。ブラケットの前にそれらの記号がある場合には、ブラケット内に構成が示された言葉がその品詞であることを表す。記号の後の数字は、同じ品詞が一つの構成素内にある場合にそれらを区別するものである。また、比較の際に、品詞と数字が同じ記号同士は同じ語を指す。

<sup>2</sup> 例えば、織田信長の妹として知られる「お市」や、怪談の登場人物の「お菊さん」「お岩さん」などがそれにあたる。

<sup>3</sup> 福岡市にある榎田神社のことを指す。

<sup>4</sup> 「お早うさん」、「おめでとうさん」は関西方言である。

<sup>5</sup> 表で挙げている NP [VP1+N1] の VP1 の活用は一例であり、過去形や進行形などが適する場合もある。

<sup>6</sup> VP [御+VP1+動詞「頂く」] は、「お貸し頂きたい」のように「VP1の連用形+(し)てもらう」と同じ意味になると捉えられるときもあるが、「お召し上がり頂ける」のように VP1 と同じ意味になると捉えられるときもある。

<sup>7</sup> 本論文で「造語成分」という語が指す意味は、「接辞より実質的な意味を持ち、複合語を構成する、それ自体のみでは自立語とみなしにくい漢語・和語・擬声語」のことである。

---

#### 参照文献

大津由紀雄・坂本勉・乾敏郎・西光 義弘・岡田伸夫(2005)『言語科学と関連領域』, 言語の科学第 11 卷. 東京: 岩波書店.

金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄(編)(1997)『新明解国語辞典』. 第五版, 東京: 三省堂.

坂本達・西方草志(2009)『敬語のお辞典』東京: 三省堂.

村田志保(2009)「日本語教育での接頭辞「お」の付く語 三種の分類提唱について—「おかばん」類、「お菓子」類、「おやつ」類」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』12: 205-219.